続「鍼灸」は「効果」があるのか？

第10回　鍼灸界の未来

琉球治療院　関　忠雄

1．治療としての鍼原理とリハビリテーションの鍼原理

現在2つの鍼原理が存在しています。「治療としての鍼」と「リハビリテーションの鍼」です。業種的には

①鍼灸だけ

②鍼灸と接骨

③訪問鍼灸マッサージ

があります。①と②は「治療としての鍼灸」が中心であり、③は「リハビリテーションの鍼灸」で成り立っています。

鍼の原理から考えると、この2つの鍼の考え方は全く別の方向に向かっていると思います。「治療としての鍼」は神経組織を刺激する方向、「リハビリテーションの鍼」はなるべく神経組織を刺激しない方向です。

「治療としての鍼」の目的は神経組織に直接刺激を与え、それにより身体の回復する力を引き出すことです。今のヨーロッパ医学が薬物により神経を鈍麻させて鎮痛させるのに比べて、「治療としての鍼」は神経組織を直接刺激して身体の回復力を活性化させるという、ヨーロッパ医学に欠けている治療法です。直接刺激を神経組織に与えるので、患者さんによって鍼は身体に合わないと思う人も出てきます。これは鍼の刺激に対する身体の反応で、手技の方法や刺激量、施術者の経験や熟練度によって異なってきます。

「リハビリテーションの鍼」は神経を刺激して身体機能を回復するのではなく、壊れた中枢神経の代わりに他動的に他の組織を動かして以前の状態に戻していこうとするもので、神経組織は刺激しません。基本的な刺鍼手段としては「鍉鍼（ていしん）」という「刺さない鍼」での施術が基本です。鍉鍼は金や銀製の細長い鍼で鍼の先端が丸く針状になっていないため刺さらず、痛みはありません。これをツボに当てて施術を行います。

2．灸の世界

ヨーロッパ医学にはなく鍼とはまた別の古代医術に灸療法があります。鍼灸として同じように考えられていますが、全く別の文明圏でできた医術で全く別の効用があります。灸が他と異なる点は人体に温熱刺激を加え人体の回復力をはかることです。灸にはもぐさと皮膚の間にほかのものをはさむ間接灸ともぐさを肌の上に直接のせて燃焼させる直接灸があります。間接灸は結合組織を伸展するのが目的で、直接灸は免疫細胞を強化することが目的です。「ぎっくり腰」や激しく痛んでいる神経痛などで灸施術は思わぬ効果を発揮します。一般に「ぎっくり腰」などで病院へ行くと鎮痛剤か湿布薬しかもらえませんが、灸では結合組織を伸展させ神経組織の緊張を緩める間接灸を行います。このときは痛みを感じる部分に何回も据えるのが有効です。灸施術は薬物と違うので何回据えても害になりません。この方法が「ぎっくり腰」や激烈な神経痛で苦しむ患者さんへの治療として最も効果があり反作用のない方法と考えています。

直接灸の免疫細胞を強化する効果は原志免太郎先生が自ら実証（108歳257日まで存命）、灸の火傷毒素により免疫細胞が強化されることを示されました。私の恩師倉島先生も84歳まで自身で足三里に直接灸を据えられ直接灸の効果を実証しました。

私が鍼灸の勉強を始めたころは今のような「せんねん灸（間接灸）」はありませんでした。多くの人は鍼灸の先

関 忠雄 Tadao Seki

1949年　長野県生まれ
1973年　中央大学法学部卒業
1978年　早稲田鍼灸専門学校卒業／倉島宗二師に師事　臨床鍼灸学を研修
　　関鍼灸治療室を開設
2003年　新潟大学医学部第一解剖学教室で末梢神経（自律神経:迷走神経）解剖を研修
2005年　佐野動物病院にて獣医学を研修
2006年　名古屋市れもん鍼灸接骨院院長
2013年　アルゼンチン（F・バレイラ）鍼灸院院長
2018年　アルゼンチンから帰国
2019年　琉球治療院勤務

生の所で「つぼ」を教えてもらって自分の家で灸を据えていました。「せんねん灸」の登場は灸の方法が変化しただけで原理が変わったわけではありません。一方で灸業界は直接灸の免疫効果にのみに関心を奪われて、それ以上の灸の原理の研究を進めないことは怠慢と言わざるをえません。

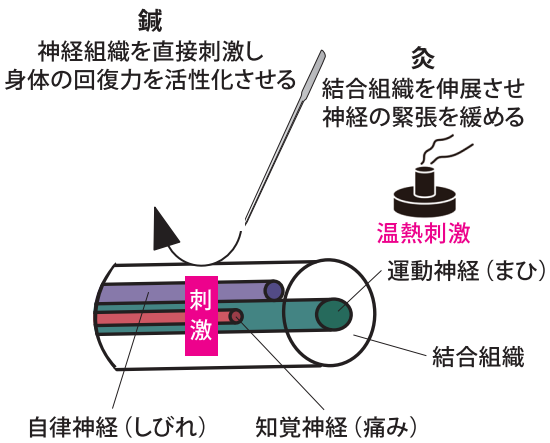

図 鍼治療と灸治療

3. 現在の鍼灸はこれで良いのだろうか

現在の鍼灸治療の世界は混乱を極めています。なぜでしょうか？　私が鍼灸の勉強を始めたころは、伝説の鍼灸治療の臨床家が大勢いました。日本の国が戦争後の混乱期から抜け出した時代でもあり、保険制度も創成期だったため今のような制度も整っていなかったこともあります。写真はそのころの鍼灸を支えていた諸先生です。筑波大学（旧東京教育大学理療科）の先生や森ノ宮医療大学を作られた先生や有名な臨床家の先生の姿が見えます。多くの先生が鍼灸を科学的な医療にしようと協力しあっていたころの一こまです。

「医道の日本」編集顧問会（1977年）

保険制度の進展が日本の国の医療制度をヨーロッパ医学の医療制度に変えてしまいました。同時に鍼灸治療も全く違った方向に変わってしまいました。それもあまりにも自然に変化したため鍼灸師自身もどこがどのように変わったのか気がついていません。当初は痛む身体を元に戻す「治療のための鍼灸」でした。しかし今の医療は「リハビリテーションの医療」に重点が移っているために鍼灸もその方向に変化しています。

２０１８年、日本に帰ってきて訪問鍼灸マッサージの研修を受けたときの衝撃は忘れられません。「鍼」が鍼灸の基本になっていたのですから。その後、訪問鍼灸マッサージの事業所に入社して介護支援センターを訪問し、ケアマネジャーに鍼灸の説明をしても話がかみ合いません。患者さんは明らかに「治療のための鍼灸」を望んでいるのにケアマネジャーらは「リハビリテーションの鍼灸」で話をしているからです。

以前、名古屋の鍼灸接骨院でしていた鍼灸治療に最も近いのは、現在鍼灸接骨院で行われている鍼灸治療のように思います。時代とともに鍼灸が変化するのは仕方ありません。一方で、現在のヨーロッパ医学も完全ではなく、鍼灸がその欠けた部分を補完しうるものであると自信をもって行動を開始することが、鍼灸の世界にとって大切だと考えています。

（完）